

ヒメイタビ *Ficus thunbergii* Maxim.

クワ科 Moraceae

1. 利用対象部位：韌皮繊維

2. 組織形態：

3年目と思われる蔓（茎）の横断面では、表皮は既に剥離し、周皮が形成されている。周皮の内側には3細胞層程度の下表皮があり、細胞壁が肥厚している。その内側には5～8細胞層程度の柔組織があり、その内側に一次繊維がある。形成時にはほぼ繊維組織の環（一次繊維環と仮称）であるが、肥大成長により離ればなれになっている。繊維細胞は断面が丸みを帯びた多角形で、10～20細胞程度の繊維塊を作り、わずかに柔細胞をまじえる。

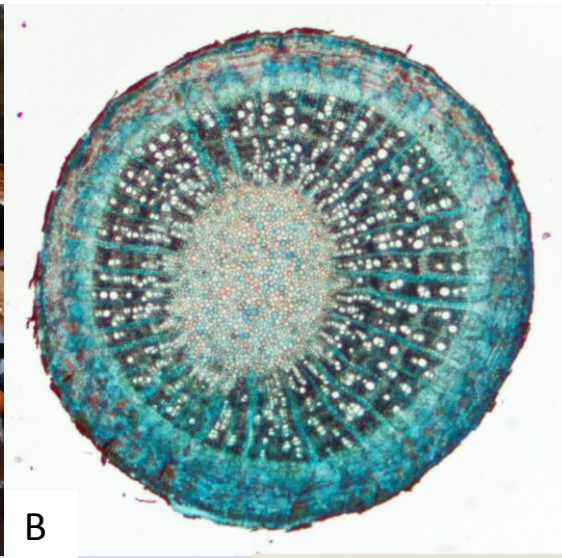
一次組織の分化に引きつづいて二次組織が形成され、内樹皮では拡散型放射組織により二次篩部は三角形状を呈し、一次繊維塊はこの三角形の先端にある。二次篩部には繊維細胞が分化を始め、ほぼ環状に連なって形成されるが、放射組織が拡散拡大することにより縦に分断される。繊維細胞の断面形態、細胞の大きさは二つの繊維環で変わらない。

3. 利用例：なし（?）

4. 遺跡出土遺物：なし



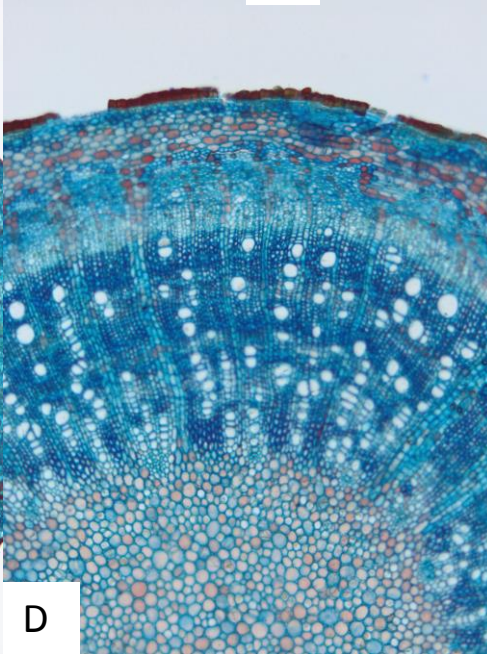
A



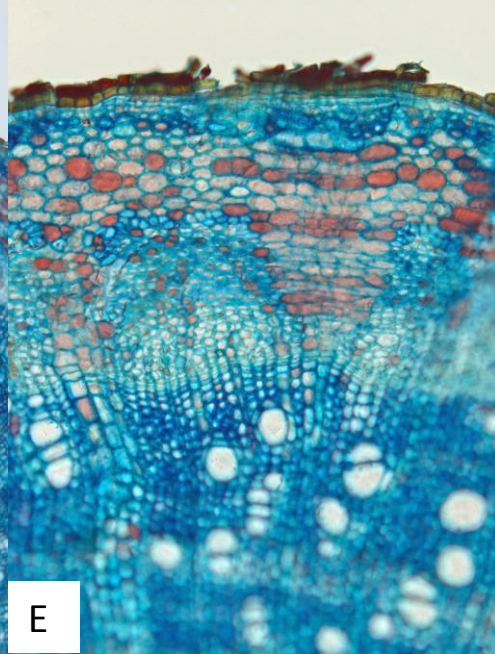
B



C



D



E

A:ヒメイタビの蔓と果実(愛媛県西予市)。B~E:三年生と思われるヒメイタビの茎(蔓)の横断面とその拡大。表皮は既に剥落し、周皮が形成されている。内樹皮には拡散放射組織と三角形状の二次篩部がある。一次繊維組織は一次組織分化時には一次繊維環をなしていたが、肥大成長により分離し、二次篩部の三角形の先端にある。二次篩部内に繊維組織は分化するが、拡散放射組織により断続的な環となっている。